銀座水族館（七つの海の魚および水産切手）

—39—

三崎出張所　神　原　　勇

クロマグロ
分類　スズキ目　マグロ科
学名　*Thunnus thynnus*
英名　Bluefin tunny

「何かいいことあった日はマグロにしますか，カツオにしますか」の広告文に見られる日本鰹鮪漁業協同組合連合会（日カツ連）の趣旨は，石油危機以来カツオ・マグロ類の消費がおちこんできているので，せめていいことのあった日の御馳走としての中級マグロ（このマグロはクロマグロの意味でなく，メバチマグロ・キハダマグロ・その他のカジキ類の総称）より多く食べてもらいたいとのことであらうと思われる。日本人にとって鮪（関西では鮓の字を用いることがあるが関東のニギリズシの全国的な普及により鮓の字は廃れる運命にあるであろう）と言へばマグロ，マグロと言へばトロと言われ，その中でもクロマグロにトドメを刺す。

クロマグロは記紀の昔から活動的な大型魚として大いに注目され，主に沿岸に押し寄せてきたものを銛で突いて漁獲したものと考へられ，食用にも供されてきた。その後網や釣り漁業の発達により沖合へと漁場も拡大し，日本近海のみならず，オーストラリア近海・南アフリカ南岸・ニューヨーク沖合からグレートバンク・ジブラルタル周辺海域から地中海にかけて，この超高級品を求めて遠洋鮪延縄漁船のサシミ船隊が，時化，大波の逆巻く真只中で日夜をわかたず奮闘を続けている。

クロマグロはマグロ類の中でも最も低温に耐え50℃～29℃とかなりの広温帯で，大西洋の水温30℃のバハマ諸島の熱帯水域から北上を続け50日たらずでノルウエー南部の北緯61度に位置する水温6℃のベルゲン沖に達した記録がある。一般に魚類は生息する海域の温度変化に応じて体温も変化するものであるが，クロマグロ・カツオ・アオザメ等の一部の回遊魚ではやや様子が異なる。即魚体温を自動的に測定記録する装置をクロマグロに装着して放流追跡した結果によれば，水温16℃の海水面から急激に潜行し，水温5℃の層に4時間以上滞溜しても魚体温は21℃から18℃に下降したのみで，それ以下には下らなかったと言われ，生息水温が低温にもかかわらず魚体温は可成りの高温である。

遊泳層は日本近海では浅く表層から50m位迄で，晩秋の頃南下するさいにはやや深くなるが，海況・気象・飼料の多寡により異なる。餌料はイカ・イワシ・サバ・ソウダガツオその他の浮遊甲殻類でその分布域に生息するものを捕食する傾向がつよい。北太平洋のクロマグロは生殖腺の熟度かう産卵場を推足すると，ルソン島近海から沖縄列島に至る台湾東方の黒潮流域で5～6月に稚魚が多数採集されるので4～6日に産卵が行われるものと推察される。

大西洋のクロマグロは西側のものは，カリブ海諸島で4月中旬～5月中旬にかけて産卵が行われ，ニューヨーク沖からグランドバンクにかけて6月～1月にかけて漁場が形成される。北東大西洋のものは5～6月産卵のため地中海を東進し，シシリー島周辺で6～7月に産卵をして，産卵終了後の7～8月は地中海を西進しジブラルタルを通過し，北上を続けイギリス諸島の西側を大きく廻りながら北海とノルウエー沿岸に向って移動を続けるが，高年魚はノルウエー北方にまで到達する。標識放流の結果によればフロリダ沖のものが，ノルウエー沖・南米のモンテビデオ沖・ビスケー湾等で再捕され，又この逆の結果も得られているので，南北両大西洋のクロマグロは相互の交流があるものと推定されている。

クロマグロ

分　類：スズキ目　マグロ科
学　名：*Thunnus thynnus*
英　名：Bluefin tunny

マグロ科の中で最も大きく、体長3.5m体重450kgに達するものもある。殆ど全世界の温帯から亜寒帯に分布し、寒冷なる水域を好む。体型は完全なる紡錘形で良く肥満しているが尾柄部はいちじるしく細くなっている。胸鰭は短く、その先端は第二背鰭前端にも達しないので他の種属との識別は容易である。肉は濃赤色でやや黒味をおび脂肪に富み超高級品である。遠洋鮪延縄漁船はこの鮪を求めて、タスマニア海、ニュージランド近海、南アフリカ沖合、北大西洋、地中海等に出漁する。

リベア　—1974

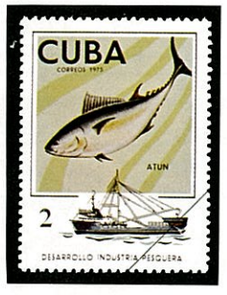
—1975

バハマ　—1947

コスタリカ　—1937

バハマ　—1954

ジブラルタル　—1953



キューバ　—1975

ユーゴスラビア
トリエステB地区　—1945